長雨・日照不足

６月

水　稲

１　早期水稲
　幼穂の発育程度などを十分に把握し、穂肥の施用適期を見極める。
　葉いもちの発生が懸念されるので、今後の発生予報に注意する。
２　普通期栽培
　低温、日照不足により分げつが抑制されることから、浅水で管理し、分げつ促進を図る。
　葉いもちの発生が懸念されるので、今後の発生予報に注意する。

大　豆

　排水対策を徹底し、土壌条件が適当な時を見計らって作業を進める。なお、育苗期間が長くなり過ぎ徒長した苗は摘心等を行う。

茶

　長雨が続き、滞水すると根腐れが発生し、また、雨上がり後の干天で「立枯れ病」が誘発されやすいので排水を徹底する。
　なお、２番茶後には輪斑病が多発しやすいので、摘採直後に殺菌剤を散布する。

野　菜

１　栽培中の場合、水が溝にたまった状態になると根腐れが発生しやすいので、排水を徹底する。露地栽培のほ場準備では、うねを高くするとともに、ほ場周りに排水溝、うねの長さが３０m以上になる場合は中溝をつくるなど排水対策を行う。
２　草勢が弱っているので、摘花や摘果等を行い、着果負担を軽減し、葉面散布剤を散布し、草勢回復に努める。
３　施設野菜は、長雨の後、晴天になると、急激な根の水分変化に対応できないため、極端な萎れや生長点、イチゴのランナーの先等の焼けが発生しやすくなる。萎れ部位、生長点、ランナー等の焼け防止のため、雨の日でも土壌水分を確認し乾燥しているようであれば、午前中に適量かん水を行うとともに、施設を閉め切らず、サイドや入り口を開放して風通しをよくし、多湿状態にならないように管理する。雨天後の晴天日は、早朝に適量のかん水を行うとともに、施設内の温度が急激に上昇しないよう、サイドや谷等を早朝から開放する。
４　風通しが悪いと病害が発生しやすいので、株元や重なっている葉の除去に努める。
５　べと病、灰色かび病、炭疽病等の病気が発生しやすい状態になっている。被害拡大防止のため、早期に病葉や病株を除去し、ほ場外へ搬出する。そして、雨の間の晴天日に、防除暦、防除指針に従い、適期防除に努めること。雨天後は、葉茎が軟らかく、薬害が発生しやすいので、基準濃度の範囲の薄い濃度（例：2,000～3,000 倍の場合、3,000 倍）で散布する等、注意して薬剤散布を行う。

果　樹・オリーブ

１　ミカン
　日照不足により、生理落果が長引く可能性が考えられるので、着果状態を確認した後に摘果作業を行う。また、マルチ等により、園内の排水に努める。
２　モ モ
　徒長枝等の整理を行い、着果枝への受光条件を良くする。
３　ブドウ
　ハウス栽培では換気、排水に努め、園内の湿度低下を図り、病害の発生しにくい環境を維持する。
４　ナシ、カキ
　生理落果のピークとなる時期である。長大になりそうな徒長枝のかき取り、剪除などを行い、樹体内の養分競合を起こさないように留意する。

5　キウイフルーツ
仕上げ摘果は、果実の状態（変形等）を確認して摘果する。
6　下記の病害が発生しやすくなるので、必要に応じて防除を行う。
柑橘類･････････黒点病、かいよう病（中晩柑）
カ　キ･････････炭疽病
ブドウ･････････べと病、灰色かび病
キウイフルーツ･･果実軟腐病、灰色かび病
モモ･･･････････せん孔細菌病
オリーブ････････炭疽病
※　防除はいずれも、農薬のラベルに記載されている使用方法を遵守すること。

花　き

1　施設花き
1）施設周りの排水に努め、内部への雨水の浸入を防ぐ。
2）換気を十分に行うとともに、雨天時には、換気扇による換気、温風暖房機による間断送風等を強制的に行う。
3）かん水は必要最小限に止め、こまめに行う。また、株元にかん水し、植物体にかけないようにする。
4）薬剤防除はできる限り燻煙、煙霧等を利用し、噴霧器による薬液散布は、必要最小限に止め、薬剤散布を行う場合は、施設を閉めるまでに薬液が乾くようにする。
5）生育や商品価値に支障がない限り、下葉や余分な枝は除去して、通風と採光をよくする。
6）罹病部分は早めに除去し、直ちに施設外へ搬出して処分する。
7）寡日照が続く中での晴天は、強日射や急激な温度上昇により、葉焼けや萎凋等を起こしやすいので、換気等により高温を防止する。
2　露地花き
1）ほ場の周囲に排水溝を設け、畝間の停滞水が速やかに排水できるようにする。
2）根の活力低下、多湿により病害が発生しやすいので、雨天の間隙をぬって薬剤散布を行う。
3）湿害により根の活性が低下して養分吸収力が弱くなり、草勢低下や生育遅延するので、500～1,000 倍程度の液肥を葉面散布する。また、肥料が流亡するので、速効性肥肥料を施用して草勢の回復を図る。（硫安 5kg/10ａ）
3　キク
1）黒斑病、褐斑病、白さび病等の病害が多発する恐れがあるので、下葉を除去する等して通風をよくするとともに、薬剤防除を徹底する。
2）親株ほ場は、できる限りビニール等で雨除けするとともに、白さび病等の防除を徹底し、健全苗を確保する。
3）電照中のものは、電照時間を通常より２～３時間程度長めにする。
4）ほ場条件などから定植遅れが予想される時は、過湿土壌に無理して植えることなく、適湿土壌になってから植える。なお、苗が老化した場合は、できる限り、新たに育苗した適齢苗を使用する（作型の変更も考慮）。

畜　産

1　湿度が高くなっているので、配合飼料及び乾草などの粗飼料のカビに気を付ける。カビのあるものは給与しない。
2　飼槽内の残飼が変敗しやすくなっているため、残飼の除去など、飼槽の清潔を保つよう努める。
3　畜舎内の湿度が上がっていれば、気温が低くても、家畜の体表面からの体温放出がうまくいかなく、暑熱ストレスを受けやすくなっているので、畜舎の換気（強制換気も取り入れる）を良くし、暑熱ストレスによる家畜の損耗軽減に努める。

飼料作物

飼料作物 今後、長雨となれば湿害による生育不良を軽減するため、ほ場に排水路を整備して排水に努める。特にトウモロコシでは重要となる。また、牧草類では生育ステージも考慮にいれて収穫し、再生草の刈取 時期・回数を調整して収量を確保する。